

CBRC Newsletter 31,32 合併号

<http://www.cbrc.jp/>

近視とミーハー



浅井 潔

(Kiyoshi ASAI)

生命情報工学研究センター長

「時間的近視」の弊害の良い例は、金融の世界にあります。投資信託に顧客がお金を預ける目的は、5年、10年あるいはもっと長期に財産を増やすためなのに、ファンドマネージャーは半年単位あるいはもっと短期での運用成績を問われ、効率的な長期的投資が行われないうのです。毎年、コンスタントに良い論文やソフトウェア、データベース、特許などを生産して賞賛され、それらの蓄積が大きなインパクトのある成果になれば、もちろん素晴らしいことですし、私自身もそのような研究を目指したいです。しかし、短期間の評価を繰り返したほうが、大きな学問的、産業的インパクトのある成果を効率的に実現できるのでしょうか。もう一つの問題は「ミーハー的選択と集中」です。「世界的にリードしている分野に特化して支援すべきだ」という議論が結果として、刹那的に注目を浴びた分野にのみ研究資金

を集中させています。「強い分野」を応援すればその分野がずっと世界のトップでいられるのでしょうか。すそ野の広い科学研究・技術開発のバラエティーを持ち、その時々でブレイクした分野が次々と世界レベルの成果を出す、というのがより説得力のある姿ではないでしょうか。産総研が担うべき産業技術においては、バランスの良いすそ野の広がり特に重要であることは言うまでもありません。

このような「時間的近視」「ミーハー的選択と集中」状況の中でも、我々は研究資金を獲得し、自分が納めできる研究活動を展開し、かつ社会に貢献しなければなりません。多くの研究分野ではそれは研究者に苦痛をもたらしますが、バイオインフォマティクスの状況は他の分野より遙かに健全です。「iPS細胞」「次世代シーケンサー」など、その時々注目される対象や要求がその時々で

変化しても、必要となる情報技術のうち本質的に重要な技術を提供できるのは、その基盤となる配列情報解析、タンパク質構造情報解析、細胞内ネットワーク解析などで高度な研究・開発を行っているバイオインフォマティクスの研究者だけだからです。

CBRCがお台場にやってきて10回目の春が訪れました。昨今は予期せぬ資金カットによって日常の研究活動の継続さえ危うくなるのかと不安を覚えることもある毎日ですが、バイオインフォマティクスに対する期待はこの9年間で大きく膨らみ、より現実的な成果に対する要求が高まっています。私は、バイオインフォマティクスがその要求に応える続けることができるはずだと信じていますし、CBRCの将来についても楽観しています。CBRCが近視とミーハーの巣窟にならない限りは。